

令和 5 年 4 月 21 日現在

機関番号：33202
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：18K04522
研究課題名（和文）沖縄・先島諸島の中世・近世期を通じた集落形態における非「格子状」空間配置の研究

研究課題名（英文）Study of Non-'Lattice' spatial arrangement in Settlement pattern through Medieval and Modern period of Ryukyu Islands-A Case Study from Villages on the Sakishima Islands, Okinawa Prefecture, Japan

研究代表者
浦山 隆一（URAYAMA, Takakazu）
富山国際大学・現代社会学部・客員教授

研究者番号：10460338
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究である非「格子状」集落の住居構成群を探求するため、考古学調査による年代考察並びに「地籍測量図」「地籍図調査資料」の地理学的手法を用い、先行文献と現地調査で確認する作業を行った。並行して、近世「格子状」集落に関する考察を学際シンポジウムとして開催した。一方では南西諸島全域に視野を広げ、集落形態とその構成原理を説明する研究も行った。結果を論文「南西諸島・喜界島における村落の地形的立地と空間構成の特徴」として発表した。また宮古島狩俣集落において継続的考古学調査が進められた。その結果は住民説明会で「狩俣集落における考古学調査」として報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近世以降に成立した街路による方形の石積み囲いで構成される集落を「格子状」空間配置、その他の不井然形態の集落を非「格子状」空間配置として捉えた。そのために考古学や地理学研究者らと学際研究を行った。「グスク時代から近世期における集落形態の構造的変遷」を実証的明らかにすると共に「御嶽の発生的意味やその変容過程から見た祭祀場所の本質」を探究した。その結果は「元島・古島（集落発祥の地）：非「格子状」空間配置」と「近世計画集落：「格子状」空間配置」と空間の関係解明に結びついた。さらに村落空間における聖域を核とした地域文化再創生の根拠をも提示した。

研究成果の概要（英文）：In order to explore the residential structure of this non-"latticework" settlement, we used archaeological dating and geographical methods such as cadastral survey maps and cadastral survey data, and confirmed them with previous literature and field surveys. In parallel, we held an interdisciplinary symposium on early modern "latticework" settlements. On the other hand, we expanded our view to the entire Nansei Islands and conducted research to explain settlement patterns and their constitutive principles. The results were presented in a paper entitled "The Characteristics of Typographical Location and Spatial Composition on Villages in The Kikaijima Island, Nansei Islands". Continuous archaeological research was also conducted in the village of Karimata, Miyakojima Island. The results were reported at a community meeting as "Archaeological Survey in Karimata Village".

研究分野：建築計画及び都市計画関連

キーワード：非格子状空間配置 沖縄先島諸島 集落携帯空間変容過程 中世相当期・近世近代期 伝統的祭祀施設 囲壁集落 地籍図調査 考古学発掘調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

沖縄の集落形態の分類は過去に仲松弥秀と高橋誠一によって試みられた。仲松は自然発達型の「不井然型」形態と、街路区画が井然と区画されたものを「ゴバン型」形態とに、二大別し、前者から後者へ変遷するとした。また高橋は集落内に道路が見られず、不定形な屋敷群が隣接する区画と細胞状に繋がっている形態を「非格子状」集落と捉えた。本研究では、近世以降に見られるような街路による方形の石積み囲いで構成される集落を「格子状」空間配置、その他の不井然形態の集落を非「格子状」空間配置として捉えた。

浦山らは沖縄の集落・住居空間について研究を進めてきた。研究の深まりから近年「近世計画村落の成立・発展過程と祭祀施設・抱護林の関係」や「『格子状』集落の立地と構造」、さらに「近世村落の村立て手法と空間構成」の課題を取り上げた。集落空間における非「格子状」形態の問題は沖縄集落研究者に残された重要なテーマである。沖縄では格子状(規則性)と非格子状(不規則性)の集落数は、ほぼ同数である。ところで考古学の分野では非格子状集落の問題は「古琉球・グスク時代」の集落事例として取り上げられる。しかし、近世「格子状」集落内部にも非「格子状」構造が読み取れる。今後は、不規則的宅地割集落や御嶽を含めた元島遺構を含めた村落確認調査が必要である。この研究は「グスク時代(中世相当期)から近世期における集落形態の構造的変遷を明らかにする」と共に「御嶽の根源的意味やその変容過程から見た祭祀空間場所の本質」を探究し、聖域空間を核とした地域文化再創生の根拠をも提供する。

前回の科学研究において、宮古島北部地域に中世相当期(グスク時代)から連綿と続く非「格子状」形態の区画や村周囲の囲い石積みと石門が存在した狩俣集落の村落全域調査を行った。また隣村・西原集落も明治7年(1874)に池間島からの分村で成立した近世末期の集落でありながら、不規則的宅地割の集落であると理解した。

今回の研究課題の設定は、宮古島の中世相当期に成立し場所移動のない「狩俣」集落と琉球処分後に村移動(分村)で成立した「西原」集落のいずれもが非「格子状」である事への素朴な疑問でもある。

2. 研究の目的

本研究において研究対象を非「格子状」集落と指定したのは、沖縄の近世計画村落の成立である「格子状」集落に対する対概念と捉えたからである。それにより「格子状」以外の諸形態を包括的に観察する視座が得られると考えた。特に集中的な地域として、先島諸島・宮古島を取り上げる。宮古島市・狩俣集落においては、中世相当期から同一場所における持続的な事例として、祭祀施設群と集落内遺構並びに集落石積み囲いを考古学調査すると共に、屋号・ムトゥ所属構成員・本家 分家・集落内住居移動等の社会学的調査を行い、集落の段階的形成過程を明らかにする。また宮古島市・西原集落においては、部落の成立年代(明治7年)が新しいため集落移動の断片的記憶が残されており、成立期の集落復元と御嶽の計画的配置原理を解説する。この特色ある2集落に加えて、宮古島市・池間集落や伊良部島も視野に加える。

中世期から現代までの集落形成を考慮した「琉球の集落空間形成過程モデル」の提案：沖縄の低島型集落の地形・地質条件である隆起石灰岩地帯における海岸段丘の発達過程に着目して、丘陵から平地へと発展した狩俣村落にモデル事例を求める。それと共に狩俣集落では中断されている祭祀儀礼の場所と施設群の考古学調査を含めた精密な測量図や施設復

元図を作成する。

近世末期に創設された非「格子状」集落の空間構成と集落移動の場所的原則：西原集落を事例とする。その前提として、明治期の集落(村民)移動の動態を知る目的で、親村(移動元)である池間島の集落空間構成調査から住居移動に伴う移動法則を抽出する。

単一島内の中世・近世期における廃村集落遺跡の調査と土地所有から見た住居移動：池間集落では、4 ムトゥ(祭祀集団)構成員の組織構造を読み解き、「どの集団が・どこに住み・どのように移動したか」という聞き取り調査を行う。また池間島の廃村遺跡(上原遺跡：旧池間村)の生業・住居を含めた生活空間像も明らかにしたい。

八重山諸島の近世計画村落内における非「格子状」空間配置の事例調査と分析：先行研究(小野正敏：1999)や発掘調査(沖縄県教育委員会：1991)等に学びながら、沖縄県立公文書館や石垣市市史編纂室・竹富町役場で収集(約 2,000 枚)した全村の格子状集落内における非「格子状」形態の宅地割部分の形態と位置の再確認を行い、集落の歴史的層性を含めた近世計画村落形成の問題を再度、検討する。

3. 研究の方法

中世期から現代までの「非格子状と格子状配置が混在する」集落を考慮した「集落空間配置形成過程モデル」の提案のために「狩俣集落」を対象とし、次の方法で行う。狩俣集落は村の発祥が14世紀に遡るとされる。狩俣部落には山籠もりを伴う秘祭「ウヤガン(祖神)祭祀」があった。祭祀は20年前に中断したままである。祭祀集団である司(神女)達の不在や高齢化、施設の老朽化・価値観の変化等で現状では衰退しつつある。①『鎌倉芳太郎資料編第二巻』収録の「ノート 18 MIYAKO Kazumata」の記録スケッチの解読とその建築的復元考察 ②集落を取り巻く、三か所の石門を持つ村域石積み囲い(障壁)の考古学的遺構基礎調査 ③集落背後の尾根山頂にある「ピシンツ(千瀬道)」の祭祀施設群の分布状況確認調査 ④住居域内の氏名分布による社会学的調査と分析。⑤旧・根井間村域内に残る祭祀施設群「ムトゥ」を中心とする祭祀儀礼区域は非「格子状」宅地割構成であり、区画石積みや石垣も含めた施設配置図と建築測量を行う。⑥その上で遺物集中域を発掘し、遺構の有無と過去の土地利用の変遷や年代を確認する。⑦狩俣の聖域への出入り口「北の石門」と村囲い石積み遺構の考古学的調査を行う。北側土塁の内面を確認し、築造方法を観察すると共に内蔵された遺物により築造年代を検討し、城郭集落の石門を含んだ障壁の全体像を提示する。

近世末期に創設された非「格子状」集落の空間構成と集落移動の場所的原則を求めるために、「西原集落」を対象として次の方法を取る。西原集落は現在も「ウハルズ(大主：ナナムイ)信仰」が健在であり、村々で宮古節(ミヤク ツツ)行事が続いている。①集落形成基本調査と空間構造分析；創設期(明治7年)の村の様子を考察するため、池間・佐良浜より移動した計88戸の居住域と屋号を特定する。次に昭和20年頃(1945)の住宅地図等から、「本家 分家関係」「同一村落内における住居移動の実態」調査を行い地図化する。その後の集落展開について昭和49年(1974)資料及び現在の地籍図より追跡する。

②村落成立と御嶽の計画的場所選定原理についても、村落成立原理の一環として調査する。創設期(明治7年)の居住分布図資料確認のため「在沖西辺郷友会」・西原自治会と共同作業を行い、入居移動の実態と法則をまとめる。

単一島内の中世・近世期における廃村集落遺跡の調査と土地所有から見た住居移動を探求するために、宮古島市「池間島」を取り上げる。

旧池間村より分村した前里村（現・池間集落）の現存する集落形態には非「格子状」街路が多く窺える。本研究を進めるうえで重要な集落と位置付けて、先ず全域悉皆調査を行う。①近世末期まで番所のある主村・池間村は 現在、廃村・上原遺跡となっている。しかし大正期まで一部の人々が住んでいたとの証言や 明治期に池間村から前里村に住居を移動した状況が把握可能とされる。また、明治期の地籍図から所有者と土地利用の状態も追跡できる。

八重山諸島の近世計画村落（格子状）内における非「格子状」空間配置地区の事例調査と分析について竹富町全域を対象にデータ収集と整理・リスト化を行う。

竹富町全域の「土地整理事業期の地籍測量図（明治 35 年頃）」の約 800 枚に及ぶ地籍図資料の繋ぎ合わせによって、格子状集落内における不規則的宅地割（非格子状）の再確認・分析調査を行う。②竹富島の近世・琉球真村にその痕跡が見出せるように、現地確認作業による見直しを行う。この作業の全貌から、近世「格子状」集落の研究に再修正を求める。

4. 研究成果

本科研は当初 3 年計画を予定していたが、コロナ蔓延や琉球諸島における渡航自粛・離島への渡航禁止措置により、研究期間が 5 年間と延長された。延期措置や実行不可能な場合も多くあった。したがって予定していた研究計画や研究方法、並びに調査対象地域の変更をせざるを得ない現実があった。それを補完するために、研究分担者（鎌田・山元）の各自の科研究テーマ（基盤 B,C）との合同調査・合同研究会の開催を実行し、共同認識と研究課題の同一的問題の共有化を図った。

『「抱護」と沖縄の村落空間 伝統的地理思想の環境景観学』の発刊：2019 年 2 月に鎌田・山元・浦山編著の p388 の書籍が風響社から出版された。この本は研究結果公開促進事業費の助成を受け、2018 年に出版に向けての内容チェックに時間を要した。「抱護」なる用語は地形・森林を利用した環境改善の思想・技術であり、18 世紀の琉球王朝の政治家・蔡温によって導入・国土全域に普及した。それは風水思想に基づき、近世琉球の格子状集落の環境や景観を形成してきた。

宮古島「狩俣集落」における考古学的遺構発掘調査：中世相当期から同一場所で、継続・持続的に発展した、3 か所の門を有する囲壁集落の成立年代を推定するための測量調査と発掘調査を自治会の許可を得て行った。(a)2018 年 5 月に集落南東部の土塁の実測調査を行った。調査概報は『東南アジア考古学』36 号に発表した。同年 12 月に同箇所の部分断面発掘調査を実施した。それにより、「この土塁の成立は、近代期に現在みられる状態になったと判断されよう。(b)2019 年 4 月に集落内祭祀施設「ザー屋」の土間祭壇部調査に伴う家屋実測と発掘調査を行った。その結果は、「13～16 世紀前半に位置づけられる青磁、土器は検出された一方で、17～18 世紀後半以降の沖縄産陶器は見られなかった。これらの年代から、ザーが機能し始めた時期は 16 世紀前半～18 世紀後半のいずれかの時点（近世琉球早期～中期）と考えられる。研究分担者・石井龍太は『沖縄文化研究』50 巻（2023）に「ザー」の発掘調査にみる宮古島狩俣集落と祭祀の展開」を発表した。(c)2019 年 12 月に「北の石門（トゥューピトウイ）」の石屋根部崩落による現状確認実測調査を行った。それによると、「石門の左右柱のうち、南側の柱となる石積みはほとんど無傷の状態であることが確認された。また周辺には遺物が散布しており、15 世紀にさかのぼる中国産青磁も」確認された。(d)その後、2020・2021 年度の 2 年間はコロナ禍で活動を中止した。2023 年 2 月 1 日に、石井龍太が「狩俣における考古学調査」報告と今後の調査内容についての自治会主催の住民説明会を

開催した。それにより、次年度からの考古学調査の再開が確認された。

③研究の主題である「集落形態における非「格子状」空間配置」の参考事例として、近世期に薩摩藩に統治された奄美諸島に残された伝統的集落を調査することで、集落構成原理の古層を探った。特に喜界島・阿伝集落の景観には、琉球の「シマ」空間を見る思いがあった。事前に浦山・鎌田が奄美大島・加計呂麻島・喜界島の予備調査を行い、その上で2018年に研究者チーム全員による喜界島・奄美大島の踏査を実施した。さらに2019年には鎌田・浦山が沖永良部島の集落調査を行った。この調査・分析の一部は、喜界島の33集落を網羅した「南西諸島・喜界島における村落の地形的立地と空間構成の特徴 第二次世界大戦前後の村落空間の復元を通じて」が日本建築学会論文報告書に2022年1月に掲載された。この論文の遂行は2020年・2021年に検討を重ねた。

第3回科研学際シンポジウム「近世琉球における格子状集落の成立をめぐる」の開催とそこに至る考察プロセス：(a)旧集落「古島（フルジマ）・元島（モトジマ）」の実態解明のため、研究分担者・山元が具体的な旧集落の範囲を想定し、地図を作成「可視化」した。それを基礎資料として現地調査を重ね、それらの旧集落の立地条件や構造を分析した。対象集落は沖縄本島うるま市「勝連南風原集落（旧南風原村）」である。2018年に山元・鎌田・浦山が「元島」の現地確認調査を実施した。その後、山元が2021.12～2022.1にかけて綿密な現地調査に基づく報告を行った。旧集落の形態は一般に非「格子状」配置の十数戸単位の住居群が5～6箇所から成る。報告によれば、南風原古島遺跡に点在する旧集落の住居とその所有敷地を意味すると解釈される「墓地+周囲の山林」地筆ユニットは、その面積は一定であり、これらの地筆ユニットが横（等高線）方向に並んでいるのではないかとの想定も見出された。(b)次に、旧集落「古島・元島」から現集落への移動秩序の解明並びに「格子」状集落の成立要因とその後の変容について論及が成された。山元は2022年初頭に草稿を研究チームに提案し・検討を求めた。草稿「南西諸島の「格子」状集落の成立をめぐる試論 南西諸島村落調査の深化をめざして一」である。論考は①南西諸島の自然的条件と1730年代という時代背景②「格子」状集落がみせる自然的・社会的条件への対応③「格子」状集落プランの限界④今後「格子」集落研究に期待される視点であった。研究チームはその論考を南西諸島における集落研究の方向付けを決める重要な視点と受け止め、学際シンポジウムの開催を決定した。⑤2022年2月に研究会（富山）で山元・鎌田・浦山が検討した。5月に沖縄で、山元論考をテーマとした意見交換会を山本正昭氏・山田浩世氏・高良倉吉氏を招いて行った。9月に沖縄にて再度、山元論考をテーマとした意見交換会に金城善氏を招いて行った。⑥2022年11月13日に、沖縄県立博物館・美術館の大ホールにて、第3回学際シンポジウム「近世琉球における格子状集落の成立をめぐる」を開催した。講演者は山元貴継。山本は考古学の立場から、山田は近世琉球歴史学の立場から、金城は民俗学と地域誌の視点からコメントを行った。総括として琉球歴史家・高良倉吉氏が全体像を俯瞰し、集落研究の新たな方法論と手法が今回、提案された意義にふれた。また、集落研究の齋木崇人氏は、建築や住居学では取り上げにくい問題を深く掘り下げ、地形・地質と水質に着目した研究の重要性が立証されたさとコメントした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鎌田誠史、山元貴継、浦山隆一、渋谷鎮明、齊木崇人	4. 巻 第87巻 第791号
2. 論文標題 南西諸島・喜界島における村落の地形的立地条件と空間構成の特徴 - 第二次世界大戦前後の村落空間の復元を通じて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.87.76	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元貴継	4. 巻 72-4
2. 論文標題 統治時代の台湾東部における日本人移民村日本集落構造と其の変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文地理	6. 最初と最後の頁 337-359
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎌田誠史	4. 巻 7
2. 論文標題 「抱護」と沖縄の村落空間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生活環境学研究	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎌田誠史	4. 巻 -
2. 論文標題 「抱護」と沖縄の村落空間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 令和2年度公益社団法人久米国鼎会文化講座	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井龍太	4. 巻
2. 論文標題 琉球諸島における多重境界性集落に関する研究 沖縄県南城市底川村跡発掘調査報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東海大学文学部考古学研究室編『日々の考古学3』	6. 最初と最後の頁 177 187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井龍太、山本正昭、阿部常樹、久我谷溪太、浦山隆一、鎌田誠史	4. 巻 第38号
2. 論文標題 宮古島狩俣集落 土壘調査概報	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東南アジア考古学』	6. 最初と最後の頁 57～61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元貴継	4. 巻 6号
2. 論文標題 沖縄県宮古島・狩俣集落の空間的構造とその変化 - 地形的条件および土地所有との関わりにも注目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『離島研究VI』	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 沖縄本島・旧勝連間切南風原村における「格子」状集落の成立
3. 学会等名 「生き続けるモンスーンアジアの 持続可能な集住環境の叡智の探求」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 島津藩領「麓」集落の空間構造 - 「門割」に注目して -
3. 学会等名 2020年人文地理学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井龍太
2. 発表標題 2020年「総合討論」シンポジウム「グスクとしての首里城 東アジアの視点から 」
3. 学会等名 法政大学沖縄文化研究所（招待講演）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 山元貴継・鎌田誠史・浦山隆一
2. 発表標題 沖縄本島・勝連南風原集落と 「モトジマ（元島）」
3. 学会等名 人文地理学会（於関西大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 朝鮮半島における「邑城（ウプソン）」について
3. 学会等名 グスク関連シンポジウム「形から見たグスクの原点を探る」（招待講演）（沖縄県立美術館・博物館）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鎌田誠史
2. 発表標題 「抱護」と沖縄の村落空間
3. 学会等名 公益社団法人 久米国鼎会 令和元（2019）年度公開文化講座（シンポジウム）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 島津藩周辺地域における「麓」集落の構造と近・現代における変容
3. 学会等名 日本地理学会（駒沢大学）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鎌田誠史
2. 発表標題 空中写真にみる沖縄の村落空間
3. 学会等名 平成30年度 沖縄県公文書館公文書活用講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山元貴継
2. 発表標題 地籍図・土地台帳から見た 宮古島の集落
3. 学会等名 平成30年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回シンポジウム「宮古諸島における15世紀～17世紀の集落-残された「モノ」から読み解く-」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井龍太
2. 発表標題 宮古・狩俣遺跡の発掘概要
3. 学会等名 平成30年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回シンポジウム「宮古諸島における15世紀～17世紀の集落-残された「モノ」から読み解く-」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鎌田誠史
2. 発表標題 総合討論の司会
3. 学会等名 平成30年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第5回シンポジウム「宮古諸島における15世紀～17世紀の集落-残された「モノ」から読み解く-」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石井龍太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 179
3. 書名 ものがたる近世琉球 喫煙・園芸・豚飼育の考古学	

1. 著者名 山本正昭、石井龍太、盛本勲ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 沖縄県立博物館・美術館	5. 総ページ数 10
3. 書名 大津波の痕跡を探る 発掘調査で確認された大津波の痕跡	

1. 著者名 鎌田誠史、山元貴継、浦山隆一 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 384
3. 書名 「抱護」と沖縄の村落空間 - 伝統的地理思想の環境景観学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石井 龍太 (Isii Ryouta) (00712655)	城西大学・経営学部・准教授 (32403)	
研究分担者	鎌田 誠史 (Kamata Seisi) (70512557)	武庫川女子大学・生活環境学部・准教授 (34517)	
研究分担者	山元 貴継 (Yamamoto Takatuzu) (90387639)	中部大学・人文学部・准教授 (33910)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------